

家庭生活事象に対する学習者の認識をふまえた授業開発に向けて ——高校生の「生活時間」に対する認識の実態——

鈴木 明子 平田 道憲 小林 京子 高橋美与子

1. はじめに

家庭科の学習内容は、個人および家族の発達と福祉、生活資源と暮らしの知識・技能、消費生活の営みと生活環境・文化等、広範な生活事象・生活要素の中から選択される。これらの内容を効果的に授業の中で扱うためには、学習者がそれぞれの題材や教材をどのようにとらえているかに関して、教師が的確に把握しておくことが求められる。

本研究では、高等学校家庭基礎における授業「1日の過ごし方(生活時間)」で使用したワークシート分析を通して、学習者の生活時間および生活設計に関する認識の様態を考察し、それらを考慮した授業を設計するための示唆を得ることを目的とする。

過去に、平田等(2002)は、高等学校家庭科における生活時間設計の学習内容に関する検討と、それに基づく授業の設計および実践を行った。その検討を通して、生活時間設計を生徒の短期生活設計という視点でとらえることや、生活時間の計画、実行、評価をさせること、家族・人間関係と関連させた学習という視点を導入すること、さらには計画を実行する際の障害要因に目を向けさせることなどの重要性を提案している。また、それらの視点および内容展開を意図した実践によって、生活時間の計画を立てることに意義を感じる生徒もいる一方で、否定的にとらえる者もいることを明らかにしている¹⁾²⁾。

平田等のこの授業実践は、旧学習指導要領における「家庭一般」の中で行われた。本研究で分析対象とする授業は「家庭基礎」の中で行っている。この科目は、授業時間削減のために現行の学習指導要領に新規に設けられた2単位の教科である。

現行の学習指導要領においては、男女共同参画社会の推進や少子高齢化等への適切な対応が重視されている。また、家族や生活の営みを人の一生とのかかわりの中で総合的にとらえ、男女が協力して家庭や地域の

生活を創造する能力と実践的な態度を育てること、家庭生活を主体的に営む能力と態度を育てることなどが家庭科の目標として示されている³⁾。

そこでは、人はライフステージごとの課題を達成しつつ発達するという生涯発達の考えに立ち、生まれてから死ぬまでの人の一生という時間の経過の中で、家族・家庭、乳幼児の発達や高齢者の姿などを理解させる。そして生活の営みに必要な金銭、生活時間、人間関係などの生活資源や、衣食住、保育などの生活活動にかかわる事柄も人の一生と関連させて理解させようとする。

また、家庭や地域の生活は、人、もの、金銭、時間、空間、情報等の相互関係、個人、家族、社会および環境との相互作用によって成り立っており、多面的、総合的であるといえる。社会の変化に対応して家庭生活を健全に営むためには、生活上の知識や技術を断片的に習得させるだけでなく、人の一生という時間軸と生活資源や生活活動などと関連付けて取り扱い、人と生活の営みを総合的にとらえるようにする。

このような取扱いをすることによって、生徒自身が現在および将来の生活に関心をもって主体的にかかわり、男女がともに協力して家庭を築くという実践的な態度を育てることができるとというのが、学習指導要領の見解である。

「家庭基礎」も、同様の展開を目指しており、「(1)人の一生と家族・福祉」の「ア 生涯発達と家族」の中で、「(イ)家庭の機能と家族」の学習内容として、家事労働とかかわらせて家族が担う家庭での役割を取り上げ、男女が協力して家庭を築くことの意義について考えさせる。一方で、「同ア」の「(ウ)生活設計」の学習内容として、生活時間の配分と有効活用、進路や職業の選択など、高校生の課題について具体的な事例を取り上げて検討させるとともに、将来の結婚や家庭生活と職業生活の在り方、自分らしいライフスタイ

ルの形成にも関心をもたせるような展開が求められている。

学習課題を現在の自分の問題としてとらえ、主体的に学習するためには、生活の現状を改めてみつめ、その事実が意味する事柄を探究することが必要である。それは、すでにもっている知識や能力を使って新たな知識や能力と対峙し、真の学びを構成することにつながる。

そこで、本研究における学習者の生活時間および生活設計に関する認識の考察においては、実態、実態に対する記述（解釈）、および実態とは無関係に語ることが可能な将来に対する記述（理想）を比較考察することによって、生徒の認識のレベル、構造、差異を明らかにすることを試みる。このことによって「生活設計」の学習内容の構造と展開方法について追求する示唆を得たい。

2. 高校生の発達課題と「生活設計」の学習

高校生は、青年期の前半に当たり、意識的に自己形成を始める時期である。内面への関心が高まり、他者との関係性の中に自己を位置づけるようになり、さらには信念や計画を踏まえて自己を定義するという方向へ発達する。一方、他者とのコミュニケーションの中で自己をとらえる時期に至り、生活や人生の可能性について、評価も含めてとらえようとする面もみられるようになる。

また、経験や知識の増加に伴い、職業的スキルや日常生活における問題解決能力が高くなり、自己や人生に対する洞察力が深まっていく。これらの能力は生涯にわたって発達するものであるが、青年期は特に急速に成長する時期である⁴⁾。

このようなライフステージ上の発達の特徴と課題をもつ高校生にとって、「生活設計」は必然的に関心を持つことができる学習であろう。しかしながら、他方で家庭や社会の問題を背景として、アイデンティティの獲得に揺れる時期でもあり、関心や学習効果において個人差が顕著であることも当然であろう。それらの点で「生活設計」の学習は、内容のとらえ方や方法的展開において困難な面ももっている。

家庭科で育成する学力について、中間（2001）は、「生活の科学的認識（知る・わかる）」「生活技術（できる）」「生活の価値認識（気づく）」の相互関係の上に、「生活問題の解決（考える、行う）」が形成されるとし、構造的モデルを提示している。そして、その上位に位置づく「問題解決能力」こそが、家庭科の最終目標である「生活課題を解決し生活を工夫し創造する力」へと発展するものであるとする⁵⁾。

グロートヴァンド（Grotevant, 1987）は、アイデンティティの形成を問題解決行動としてとらえ、自分あるいは自分の環境についての情報を、重要な人生の選択を決断するために集めることを目指すものとしている⁶⁾。また、その作業には、個人的特徴としての自尊感情（self-esteem）や認知的能力などが関与し、自己モニターすることが作業を進める要因となる。さらに、文脈的要因として、家族や友人や学校環境なども影響を及ぼし、作業を支えたり、個別の視点の発達を刺激するコミュニケーションの機会を提供する。

「生活課題を解決し生活を工夫し創造する力」を身に付けるためには、このアイデンティティ形成に向けての問題解決行動が重要であることはいうまでもない。特に家族との関係の中で、あるいは他者とのコミュニケーションによって自己や自分の生活をつみづめることは、発達課題の達成のためにも、家庭科の学習課題の達成に向けても効果的であろう。

「生活設計」という題材も、高校生の発達課題であるアイデンティティ形成を促すことにおいて、また家庭科の学習課題に適合した授業展開をすることにおいて価値のある学びを提供するものである。しかしながら同時に、個人の内的発達や家族との関わりというプライベートな側面を刺激することになり、学習者の発達にマイナスの影響を与えたり、現在もっている関係性を壊すといった危険性も孕んでいる。また、一般論として展開したのでは、学習者の学びに関与するに至らず、題材の価値が半減する。

発達課題と学習課題に適合し、それらに接近できる「生活設計」の授業を構築していくためには、学習者の生活課題と、学習対象への認識のさらなる把握が必要である。ここでは、「生活時間」の授業を通してその実態の一端から学習者の認識を探った。

3. 学習者の「生活時間」に対する課題と認識

(1) 授業の概要

授業は、小林によって、2004年5月に高等学校1年生を対象に実施された。分析対象は3クラスである。表1に3クラスのワークシート分析対象者の人数を示す。

表1 分析対象者の人数

クラス	人数	(人)	
		男	女
A	34	20	14
B	28	15	13
C	31	15	16
計	93	50	43

「人の一生と家族」の単元計画は以下のとおりである。

総時数20時間

- | | |
|---------------------|------|
| 1. 私の人生を築く | 1時間 |
| 2. ライフコースと生活課題 | 3時間 |
| 3. 家族と自分との関わり | 16時間 |
| ア. 家族・家庭とは | (1) |
| イ. 1日の過ごし方(生活時間) 本時 | (1) |
| ウ. 家事労働 | (1) |
| エ. 食生活において | (13) |

本時「1日の過ごし方(生活時間)」の目標と指導過程は次頁のとおりである。

(2) 分析および考察の視点

授業で使用したワークシートでは、主に3つの作業を課している。ひとつは「1日の過ごし方の実態」として、平日と休日それぞれの家族員個々の「収入労働時間」、「家事労働時間」、「社会的文化的時間(団らん時間以外の自由時間)」、「生理的時間」および「団らん時間」を授業前の課題として調査させた。さらに授業中に「その実態についてどのような問題を感じ、どのように改善したいと考えているか」をそれぞれの生活時間別に、「気付き・特徴・問題点」と「解決に向けての対処法」として問うている。また、「将来の生活時間」を、「生殖家族として、家庭生活、職業生活、余暇生活をどのように考えるか」という設問に答える形で記述させている。これら3つの作業によって、現在の生活時間のもち方や計画性について再認識させるとともに、それを通して将来の生活設計を考えさせるという、現在と未来を結ぶことが意図されている。これらをそれぞれ生活時間の「実態」、「実態の解釈」、「理想」ととらえて考察した。

分析対象者の家族員の有無と兄弟姉妹数の平均値を表2に示す。

表2 分析対象者の家族構成(各家族員を有する割合)と兄弟姉妹数(本人含む)の平均値

	(%)								(人)
	父	母	兄	姉	弟	妹	祖父	祖母	兄弟姉妹の数
男	92.0	98.0	10.0	18.0	28.0	40.0	10.0	18.0	2.02
女	83.7	97.7	18.6	11.6	23.3	30.2	9.3	18.6	1.91
平均	87.9	97.9	14.3	14.8	25.7	35.1	9.7	18.3	1.97

本人以外の家族員の影響については、主に、父母の生活時間との関係に注目した。兄弟姉妹がいない、いわゆる一人っ子は全体の25.8%であり、祖父母と同居している家庭は、約2割であった。兄弟姉妹の有無お

よび祖父母との同居の有無による生活時間の比較を行うには対象数が少なく、これらの家族員の影響については、補足的にとらえた。

まず、本人の「1日の過ごし方の実態」を確認するため、収入労働時間、家事労働時間、社会的文化的時間、生理的時間および団らん時間の平均値を算出した。平日、休日合わせて1週間単位で生活時間のパターンを確認する必要もあるが、ここでは「収入労働時間」と「家事労働時間」の平日におけるバランスに注目したいと考え、平日のみについて考察した。

その上で、父親および母親の各生活時間との相関係数を求めた。その結果を考察するとともに、正負ともに高い相関を示した項目において特徴的な生徒に注目し、現実の認識と将来への思いに関する自由記述について考察を行った。

(3) 1日の過ごし方の実態

本人の1日の過ごし方を生活時間別平均値として表3に示す。

各生活時間の長さについて男女間に有意な差は認められず、男女とも家事労働時間と団らん時間の短さが顕著であった。

表3 1日の過ごし方(生活時間)の実態

	(時間)				
	学業	家事労働	社会文化	生理的	団らん
男	10.24	0.12	4.27	8.57	0.66
女	9.69	0.36	4.19	8.55	0.87
平均	9.97	0.24	4.23	8.56	0.77

また、父親および母親の生活時間とのピアソンの相関係数(r)を求め、表4に示した。各生活時間の長さに男女間の有意差は認められなかったため、全員を対象に分析した。また、弱い相関が認められると捉えられる $r \geq 0.2$ の値に注目した⁷⁾。

本人の生活時間については、学業時間が長いほど生理的時間と社会的文化的時間が短くなる(生理的時間 $r = -.256, p < .05$; 社会的文化的時間 $r = -.752, p < .01$)。学業時間には通学時間も含まれているので、そのために長くなる者もいるが、睡眠時間や余暇時間をとるか、あるいは勉強をするかの選択が彼らにとって重要であることが推察できる。

家事労働時間については、父親の家事労働時間が長いと子どもの家事労働時間も長い($r = .224, p < .05$)が、逆に母親の家事労働時間が長いと子どもの家事労働時間は短くなる傾向がみられる($r = -.204, p < .1$)。家庭における親の性別役割が子どもの家事労働時間の持ち方に影響を与えていることが推察できる。また、

本時の題材 「1日の過ごし方（生活時間）」

本時の目標

1. 自分や家族の生活時間を調査してグラフにまとめ、主に次の視点から考察し、改善策を検討する。
 - a. 家族の生活状況を知り、各個人の生活時間のバランスはとれているか？
 - b. 生活時間別の状況からみた特徴や問題点は何か？
2. 生活時間の特徴を平均的な生活時間の過ごし方と比較し、社会的な背景の影響とともに考慮し、社会的にも改善策が検討されていることを知る。
3. 将来、自分の生む家族（生殖家族）において生活時間を設定するとき、重視することは何か整理しながら、家族が十分コミュニケーションがとれ、お互いに充実したゆとりのある生活を設計できる姿勢を培う。

指導過程

過程	学習内容	予想される生徒の活動	指導上の留意点	資料	時間
導入	本時学習内容の確認	・家族の日々の生活時間の調査をもとに、家族との関わりの中で自分としてどう関わればよいかという課題意識をもつ。	・家族が個々に充実した生活を送るとともに、互いに助け合い、精神的安らぎが得られ、温かい家庭生活を送るために、自分としてどう関わればよいか考えさせることを課題とさせる。		3分
展開	a. 家族の生活時間の特徴・問題点	・家族一人ひとり自分のための時間が確保でき、充実した生活ができていくか検討する。 ・生活時間別（特に、収入労働時間、家事労働時間、社会的・文化的な生活時間、団らんの時間）に特徴や問題点を検討し、発表する。	・次の視点から生活時間を検討させる。 *個人の生活時間のバランスはとれているか？ *生活時間別の特徴や問題点は何か？	各自の生活時間調査のグラフ	7分
	b. 原因・背景	・その原因や背景を話し合い、発表する（グループ活動）。 〈ワークシートへ記入〉	・共通した特徴・問題点で整理し、こうした特徴や問題点が生じる背景を考察させる。	ワークシート	13分
	c. 解決の対処法	・提示資料から、我が国の状況を把握する。 ・問題点の克服に向けての対処法を話し合い、発表する（グループ活動）。 〈ワークシートへ記入〉 〈発展学習〉として ・社会的背景や諸外国の状況等についてより具体的に調べる。	・資料（学習ノート、TP）をもとに補足説明する。 ・家族の絆を図り、一人ひとりも充実した生活を送れるための対策を話し合わせる。 ・我が国の現状を国際的視点で把握するために、社会的背景や諸外国の状況等について具体的に調べるよう促す。	資料（学習ノート） TP①②③	13分
終結	まとめ ・生涯を見通し、豊かな生活をするために	・将来的な生殖家族の中で、家族のコミュニケーションを大切に、豊かで充実した生活を送るには、どのように生活時間を設計するか考えを整理する。 〈ワークシートへ記入〉 〈発展学習〉として ・課題に取り組み、家族関係をデザインしてみる。	・現在のみならず、将来的展望に立ち、豊かで充実した人生を送るため家庭生活・職業生活・余暇時間のバランスをどのように図るか、各自の考えを整理させる。 ・発展学習としての課題に取り組み、家族関係をデザインさせる。	ワークシート	7分

表 4 子父母の生活時間の相関係数

	子学業	子家事	子生理	子文化	子団樂	父就労	父家事	父生理	父文化	父団樂	母就労	母家事	母生理	母文化
子家事	-0.150													
子生理	-0.256 *	-0.062												
子文化	-0.752 **	0.027	-0.155											
子団樂	-0.125	0.107	0.126	-0.179										
父就労	0.065	-0.002	-0.015	0.100	-0.099									
父家事	0.015	0.224 *	0.069	-0.037	-0.039	0.011								
父生理	-0.102	-0.049	0.402 **	-0.063	0.064	-0.376 **	-0.208							
父文化	-0.003	-0.155	-0.134	0.130	-0.154	-0.373 **	-0.074	-0.192						
父団樂	-0.173	0.310 **	-0.075	-0.032	0.577 **	-0.116	0.037	-5.230 **	-0.205					
母就労	-0.066	0.186	-0.070	0.151	-0.201	0.196	0.204	-0.115	-0.058	-0.080				
母家事	0.182	-0.204	-0.069	-0.195	0.180	-0.197	-0.075	0.128	0.023	0.008	-0.786 **			
母生理	-0.137	0.008	0.583 **	-0.005	-0.025	-0.077	0.093	0.471 **	-0.016	-0.073	-0.008	-0.272 **		
母文化	-0.047	-0.055	0.029	0.070	0.016	0.162	-0.210	-0.116	0.124	0.038	-0.575 **	0.232 *	-0.084	
母団樂	-0.005	0.098	0.081	-0.180	0.680 **	0.016	-0.014	0.012	-0.276 *	0.702 **	-0.206	0.091	-0.031	0.101

： $|r| \geq 0.2$ ** : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

父親の団らん時間が長いと子どもの家事労働時間が長い ($r=.310, p<.01$)。父親が家族と関係をもつことは、子どもが家族に協力する環境につながるのではないかと考えられる。

子どもの生理的時間は、父親母親の生理的時間と比較的強い正の相関をもっている (父親 $r=.402, p<.01$; 母親 $r=.533, p<.01$)。同様に子どもの団らん時間も、父親母親の団らん時間と比較的強い正の相関を示した (父親 $r=.577, p<.01$; 母親 $r=.680, p<.01$)。子どもは個人的な時間を重視している一方で、生理的時間と団らん時間については、それぞれ父親母親のそれらの時間のもち方に影響を受け、生活時間の基盤をつくっていると考えられる。

父親の収入労働時間は平均11.67時間であった。一方、母親の収入労働時間は、平均5.75時間で、8時間以上の者40名、8時間未満の者23名、専業主婦28名であった。父親は収入労働時間が長いと、生理的時間と社会的文化的時間が短い (生理的時間 $r=-.376, p<.01$; 社会的文化的時間 $r=-.373, p<.01$)。一方で母親の収入労働時間と家事労働時間の間には、強い負の相関が見られた ($r=-.786, p<.01$)。すなわち、収入労働時間が長いと家事労働時間は減少する。同時に、社会的文化的時間および団らん時間も短くなる (社会的文化的時間 $r=-.575, p<.01$; 団らん時間 $r=-.206, p<.1$)。

さらに、生理的時間および団らん時間は、父親母親間で比較的強い正の相関がみられ (生理的時間 $r=.471, p<.01$; 団らん時間 $r=.702, p<.01$)、子どもも含めて家族で同様のパターンをとっていると推察できる。しかしながら、父親母親の収入労働時間のもち方によって、それらは変化するものでもあり、各々の家族固有の生活時間がつくりだされている。

(4) 現実の認識

ワークシートの自由記述については、全般的に女子の方が、現在の生活についても将来の生活についても、内容が具体的であり、一人ひとりの家族員の過ごし方をとらえていることがうかがえた。一方男子の記述は客観的ではあるが具体性には乏しく、一般論として回答しているように思われるものも多かった (後述記述例参照)。

① 家族の家事労働分担に特徴がある者の記述

ここで、子父母の生活時間の相関係数の分析から明らかになった特徴のうち、父母の家事労働時間のもち方がそれぞれ子どもの家事労働時間に影響を与えていることに注目し、子父母の家事労働時間が特徴的な者を抽出し、それらの子どもの自由記述を考察した。

対象者は、父親の家事労働時間、子どもの家事労働時間ともに比較的長く、母親の家事労働時間が3時間以下と短い者4名 (グループA; 男子1名: M1, 女子3名: F1, F2, F3) と、父親、子どもともに全く家事労働時間をもたず、母親の家事労働時間が比較的長い (10時間以上) 者6名 (グループB; 男子4名: M2, M3, M4, M5, 女子2名: F4, F5) の計10名である。

生活時間の実態調査における気付きや特徴については、母親の家事労働分担が多い、母親以外の家族の家事労働分担が少ない、団らん時間が短いなど類似の記述が多かった。そこで、実態に対する「解決に向けての(家族の)対処法」に関する10名の記述に注目した。生徒の自由記述については、表現および字句等、記述の通りそのまま掲載した (表5)。

両グループを比較すると、グループBでは、現実を受け入れて、対処法を考えている様子はみられるものの、問題解決に向けての主体的な関心の乏しさが推察される。また、自分の立場でできることを考えている面もみられるが、具体性に乏しく、実践につながる意思を感じられない記述もみられる。一方、グループAでは、具体的な記述がみられ、家族の立場や思いをみつめて自分のできることを考えようという姿勢がうかがえる。

家庭における家族の家事労働分担に特徴をもつ10名の自由記述から、父親が家事労働をより多く分担している環境で、子ども自身も実際に家事労働に従事している者は、生活時間の課題に対して主体的に向き合い、課題解決を行おうとする姿勢をもっており、この授業における学習によって、教師の意図どおりあるいはそれ以上の構成的な学びが得られた可能性も高いと推察する。父親が家事労働に従事する背景には、様々な要因があると考えられるが、どのような要因や必然性があるにしろ、そのような環境は子どもにジェンダーフリーの意識をもたせる効果があると考えられる。

一方で、家庭環境の中で、性別役割分担の現実を受け入れなければならなかったり、家事労働分担の課題に向き合う機会のない者は、自分の体験の中で授業を通して学習したことを生かす具体的な方法を見つけにくいのではないと思われる。その中でも自分ができることを主体的に実践するための工夫を考えさせたい。

② 家族の団らん時間に特徴がある者の記述

子父母の生活時間の相関係数の分析から、団らん時間のもち方は生理的時間とともに、子父母で比較的強い正の相関があり、同様のパターンをとっていることが明らかになった。そこで、子父母の団らん時間に特

表5 家族の家事分担に特徴がある者の生活時間の実態に対する記述

生徒	収入労働時間	家事労働時間	社会的・文科的生活時間	団らん時間	備考	
グループA	M1	母が望むならアルバイトをしてもいいと思う。	家族で協力して家事をしていく。休日はなるべく自分と父が家事をする。	もし増やすとするなら、一つひとつの行動を素早くする(団らん時間以外)。	平日も団らん時間を多く取る。	母専業主婦
	F1	たまに家に帰ったらいっぱい家事を手伝う。	家に帰ったらいっぱいお母さんの手伝いもする。	記述なし。	できるだけ家に帰るようにする。	本人下宿中
	F2	記述なし。	母に頼りすぎずに気づくり人がやる。自分のことは自分でやる。	食後の片づけを手伝ったりして、母のゆっくりできる時間を増やす。	みんな塾や仕事などでなかなかそろわないけど、休みの日は、できるだけ話すなどする。	父母ともに収入労働時間が10時間以上
	F3	問題は特になし。	平日には忙しくて母を手伝えない場合もあるが、休日には家族に責任をもって家事労働をそれぞれに決めて分担するようにする。	父、母に少なくなる原因が、主に家事労働時間の偏りによるものなので、家事の分担。	平日と休日に差がないことからもう少し休日の昼間にもっとアクティブに活動できるとよいと思う。近くの公園にラケットを持ってでかけよう。	母はパートタイマー
グループB	M2	問題点として父だけが働いているといえるかもしれないが家族の中でそれは納得していることなのでこのままでいいと思う。	家族が家にいる時はできるだけ家事を行う。	休日に家事をみんなで手伝う。	今のままでいいと思う。よくとれているから。	母専業主婦
	M3	ない。	もっと僕が手伝いをする。	ない。	休日、団らんは食事のときだけなので、もう少し他のときも団らんの時間をつくる。	母専業主婦
	M4	しかたがない。	協力してする。	なにか一緒にする。	食事とかいっしょにできるだけとるようにする。生活時間の調整。	母専業主婦
	M5	休憩を取りながら仕事する。(父のこと)	暇な休日とか時間がある時に少しは手伝う。	いろんな趣味を持つことは大切だと思います。	一緒にテレビをみたり麻雀をして仲良くなる。	母専業主婦
	F4	問題点なし。	父、妹、私もできるだけ役割分担表などを作って手伝うべきだ。	この場合もできるだけ手伝うべきだ。	土日は必ず家族がそろって食事をとるようにする。	母専業主婦
	F5	特に問題はないと思う。	テレビを見るなどの時間をさいて皿洗いくらいは母以外の人がやればよい。	テレビの見過ぎに対して体調も考えて睡眠時間ももっととれるようにテレビの時間を減らす。	なるべく食事の時間を一緒にとるよう努力する。	母専業主婦

徴がある者を抽出し、それらの子どもの自由記述を考察した。

対象者は、子ども、父親、母親ともに団らん時間が1日2時間以上の者5名(グループC;男子2名:M6, M7, 女子3名:F6, F7, F8)と、子ども、父親、母親ともに団らん時間を全くもたず、かつ母親が専業主婦である者5名(グループD;男子3名:M4, M5, M8, 女子2名:F5, F9)の10名である。表6に記述を掲載した。(M4, M5, F5はグループBでも掲載)

「収入労働時間」については、「問題がない」「しかたがない」といった記述が両グループで見られるが、家族での団らん時間が長いグループCでは、「父がゆ

っくり休める」「残業を減らす」「社会的改善」「父が休みの日」「父は仕事で疲れている」のような父親を気遣う記述や家庭の外に目を向け社会との関係性を問う記述もみられた。これらの生徒は、団らんによって、より深く家族の思いを理解し、他者や社会との関係性を見つめる機会を得ているものと推察される。

「家事労働時間」については、「協力」「分担」「手伝う」「家事をする」といった記述が両グループで見られるが、グループCでは、自分の意思や解決策への価値付け、他の家族員への期待などの記述があり、自分の考えを主張できると同時に、解決に向けて他者の関わりも重要であることを認識している様子が推察で

表6 家族の団らん時間に特徴がある者の生活時間の実態に対する記述

生徒	収入労働時間	家事労働時間	社会的・文科的生活時間	団らん時間	備考	
グループC	M6	特になし。	子供たちはなるべくちらかさないようにするべきだ。言うことを聞かないけど・・・僕は手伝うようにしなければならない。	弟、妹などはテレビゲームばかりしている！少しならいいが、宿題をしてからやってほしいものだ。またそれにより就寝時間が遅れていることもあり、なおさら改善する必要がある。注意するようにする。	記述なし。	母専業主婦
	M7	父が家でゆっくりと休める環境をつくる。	分担する。	平日にも取るようにする。	家にいるときは、できるだけ家族と過ごすようにする。	母専業主婦
	F6	残業を減らす。(能率を上げる。)社会的な改善を。	家族みんなで協力しあってやる。自分でできることは自分でやる。能率を上げる。使える機械や施設は使っていく。	趣味、生きがいをみつける。個人生活を充実させる。	生活時間を調整しあう。(努力をする。)日ごろから声をかけあい、話をする。	母の収入労働時間9.5時間
	F7	父が休みの日、休日で仕事がない日に積極的に話をするようにする。	私も手伝える時は手伝って、父や兄も自分でできることはちゃんと自分でしてもらうようにする。	お互い共通の趣味をみつけたり、相手に合わせてみようという心をもつコトも大切だと思う。	休日でも父が仕事の日があるので、それ以外はみんなと団らんの時間がもてるようにする。	母の収入労働時間9時間
	F8	しかたない・・・。(父は仕事で疲れている分、家事などはあまりできていないので、他の人で手伝う。)	母以外の他の人がもっと分担して家事をする。(分担・協力)	個人で過ごすことが多いので、ある程度の時間を、団らんの時間などに変えたらどうか。	生活時間を調整しあう。休日は一緒にでかけたりする。	母の収入労働時間6時間
グループD	M4	しかたがない。	協力してする。	なにか一緒にする。	食事とかいっしょにできるだけとるようにする。生活時間の調整。	母専業主婦
	M5	休憩を取りながら仕事する。(父のこと)	暇な休日とか時間がある時に少しは手伝う。	いろんな趣味を持つことは大切だと思います。	一緒にテレビをみたり麻雀をして仲良くなる。	母専業主婦
	M8	特に問題なし。	できることをみんなで分担する。	特に問題なし。	平日にも時間を作るようにする。	母専業主婦
	F5	特に問題はないと思う。	テレビを見るなどの時間をさいて皿洗いくらいは母以外の人がやればよい。	テレビの見過ぎに対して体調も考えて睡眠時間ももっととれるようにテレビの時間を減らす。	なるべく食事の時間を一緒にとるよう努力する。	母専業主婦
	F9	母もパートとかで働く。自分達も何かできることをする。	平日でも普段から手伝いを心がける。家族みんなで家事をすると一つの団らんにもなるので、休日はなるべく家族全員でする。	父母に労働だったり家事という負担をかけてしまった結果父と母のこの時間が少なくなっているのだからなるべく家族全員で分担するようにする。	平日はバラバラになりがちだが、全員そろった時は少しでもみんなで会話ができるようにする。	母専業主婦

きる。

「社会的文化的生活時間」「団らん時間」に関するグループCの記述は、他の家族員への思いが具体的に語られることが多い。グループDの記述は、F9を除き、表面的な記述にとどまっている。

家族の団らん時間のもち方に特徴をもつ10名の自由記述の分析から、団らん時間が長い場合は、自分のみならず他の家族員の生活時間の課題に対しても意識が

高く、他者や社会との関係性の中で課題の解決策を考える姿勢をもっていることが示唆された。また、この授業での学習により、課題解決への意識が高まった可能性も考えられる。家族で団らん時間をもてない背景には、様々な要因があると考えられるが、子どもからの積極的な介入を促し、その機会をつくる手だてを工夫できる知識と技能を身につけさせることが求められており、この後の授業展開における学習が意味をもつ

表7 家族の家事分担に特徴がある者の将来の生活時間および生活設計に対する記述

生徒	将来の生活時間および生活設計に対する記述
グループA	M1 家庭生活においては家族が協力する。職業生活はどちらか一方は必ず職業について、もう一人が望むならアルバイトかパートなども良いと思う。余暇生活は家族みんなで楽しむべきだと思う。
	F1 だんなさんと家事とかを分担してがんばる。子供に対しては過保護にならないようにする。休みの日はできるだけみんなで過ごす。
	F2 結婚できれば、共働きして、家の仕事や、子育てなどは、協力してやりたい。子供がある程度大きくなれば、子供にも家事を手伝ってもらったりして、家族みんなで協力して生活していきたい。そして、できた余暇時間は、家族の団らんの時間など、有効的に使っていきたい。
	F3 家庭生活では、次の世代を育てることを役目として、これを中心に責任をもって子どもを育てていきたい。職業生活は自己を実現する場として、生活の中での楽しみとして、また経済生活を生み出すためのものとして活動したい。余暇生活はあくまで家庭生活、職業生活を精神的に支えるものとしてのポジションでありたい。子どもを次の生殖家族として送り出したあとは、これを中心にしてもよいと思う。
グループB	M2 自分だけ働いて、家族と過ごす時間をなるべくとりたい。仕事人間にならないくらいに働くが、しっかりお金をかせぎたい。余暇は家庭で過ごすべきだ。
	M3 平日にはがんばって仕事をし、家にかえってもすぐ寝るのではなく、少し、家族としゃべってからね。休日には、家族サービスをする。でも、自分のための時間も少し確保する。
	M4 うまくとる。
	M5 本当は余暇生活ばかりがいいけど、そおも言ってもらえないので家族全員が生活していけるくらいに頑張ってる仕事をする。
	F4 私はもし子どもを産んでも仕事をやめたくありません。だから夫とともにパートナーシップを築きながら協力していきたいです。家庭生活では分担をして、お互いで支えあっていきたいです。余暇は家庭のコミュニケーションもかねて一緒に出かけたりしたいです。
	F5 夫婦共にやりがいのある仕事がある場合は共働きし、特に仕事をする気がなく、稼ぎに問題がなければどちらかが家事専門になる。家事は日番や週番でよい。

表8 家族の団らん時間に特徴がある者の将来の生活時間および生活設計に対する記述

生徒	将来の生活時間および生活設計に対する記述
グループC	M6 家族と思いやりを持ちながらの相談をする。
	M7 家族と共に過ごしたいけれど職業につかないと生活していけないので、バランスを考え、両立していきたい。
	F6 家庭生活では、やっぱり家族で家事を分担してやっていきたい。職業も子どもが小さい時はやらなくても、子どもに手がかからなくなったらやっていきたいと思っているので、家族の協力が必要だと思う。余暇は家族そろって出かけたりしたい。もちろん個人の時間も尊重して。
	F7 職業生活において、まず自分たちが暮らしていくのに十分な収入を得たら、そこから自分たちの生活に必要なことを家庭生活において実行する。余暇時間は余った時間を家族団らんなどとして過ごす。なるべく、余暇生活の時間をとり、仲の良い家族にしたい。
	F8 妻、夫とも働いていきたいが、家事はちゃんと分担したい。できる限り、休日をあわせるようにして、少しでも多く一緒に過ごす。家庭、職業、余暇、どれに偏ることもなく生活をつくりたい。
グループD	M4 うまくとる。
	M5 本当は余暇生活ばかりがいいけど、そおも言ってもらえないので家族全員が生活していけるくらいに頑張ってる仕事をする。
	M8 家庭生活：職業生活：余暇生活が3：5：2か4：4：2。家庭生活が一番多いのが理想ではあるが、現実にはどうしても職業生活が多くなるざるをえないと思う。かといって余暇生活は必要なので、上記のような比率になった。
	F5 夫婦共にやりがいのある仕事がある場合は共働きし、特に仕事をする気がなく、稼ぎに問題がなければどちらかが家事専門になる。家事は日番や週番でよい。
F9 家庭生活—生活を共にしている家族と役割分担を決め、自分の仕事を理解して取り組む。また誰かの協力が必要な時は全員でできるようにする。職業生活—夫婦のみの場合、共働きでも片働きでも2人で協力する。互いの職業をきちんと理解し合うべきだと思う。子供がいる場合は、子供にも理解してもらいみんなで理解を深める。余暇生活—家族全員がバラバラにとるのではなく、全員の意見を聞いて休みを一致させた方がよいと思う。そうすると家族と共に過ごす時間が増え、家族の絆がより深まる。	

であろう。

(5) 将来への思い

これら17名は、将来の自分の家庭において、どのような生活時間をもちたいと考えているのであろうか。この設問に対する記述回答は、理想と考える生活時間のもち方であるとともに、将来の生活設計への思いでもある。また、この授業を位置付けている単元「人の一生と家族」の「将来の結婚や家庭生活と職業生活の在り方、自分らしいライフスタイルの形成にも関心をもちたい」という目的を実現するために有効な作業である。

① 家族の家事労働分担に特徴がある者の記述

家族の家事労働分担に特徴がある10名の「将来の生殖家族における家庭生活・職業生活・余暇生活のバランスについて考えること」についての記述を表7に掲載した。

グループA、Bとも将来に対して、夢と憂慮をもっていることが伺える。ともに「協力」「分担」「家族みんなで」「家族と」「がんばって」という記述がみられ、困難もある程度予測しながら、家族で協力して充実した生活時間を送りたいと考えていると思われる。しかしながら、グループAには職業生活を自己実現のための機会ととらえたり、他の家族員の生活時間を意識した記述が多いのに対して、グループBの特に男子では、自分自身に関する記述が多く、ジェンダーに対する意識の不足もみられ、家族の協力や団らんも義務ととらえているようにも思われる。女子にも、「家事専門」や「家事は日番や週番」という記述がみられるように、「分担」することによってすべて解決しようとする姿勢が伺える。一人のひとの生涯発達における生活時間のもち方について、さらに多様な価値があることにも気づかせたい。

② 家族の団らん時間に特徴がある者の記述

同様に、家族の団らん時間に特徴がある10名の記述を表8に掲載した。

グループC、Dともに、家族相互の関わりを大切なこととしてとらえており、家庭生活、職業生活および余暇生活をよりよい形でもちたいという思いをもっていることが伺える。しかしながら、グループCは、「思いやり」「バランス」「家族の協力が必要」「個人の時間も尊重」「仲の良い家族」という記述によって、それらを表現しているが、グループDは、同様のことを述べていても、義務的に捉えているのではないかとと思われる表現もみられる。グループDは役割分担や協力の必要性を理解しているものの、現実における困難

性をより強く感じているのではないかと推察する。日常的に家族員相互の立場を思いやり、言葉に耳を傾ける気持ちが大切であることにも気づかせたい。

4. まとめ

本論では、学習者の報告した生活時間の実態から、本人の家事労働時間や団らん時間に影響を及ぼしていると考えられる、父親の家事労働分担と団らん時間のもち方に焦点を当て、それぞれの実態に対する記述と将来に対する記述について考察を試みた。

その結果、それらの実態によって、自己の生活時間への認識や、将来の生活時間や生活設計への認識に差異があることが明らかになった。しかしながら、認識のレベルと構造については、性格や生活価値などの個人的要因、家庭的要因および社会的要因の影響を受け、その背景が複雑であることから、言及することは困難であった。

父親が家事労働をより多く分担している環境で、生徒本人も実際に家事労働に従事している者は、生活時間の課題に対して主体的に向き合い、課題解決を行おうとする姿勢が記述にみられた。また、家族での団らん時間が長い者は、自分のみならず他の家族員の生活時間の課題に対して意識が高く、他者や社会との関係性の中で課題の解決策を考える姿勢が記述にみられた。将来についても、職業生活を自己実現のための機会ととらえたり、他の家族員の生活時間を意識した記述が多かった。

一方、家庭環境の中で、性別役割分担の現実を受け入れなければならなかったり、家事労働分担の課題に向き合う機会のない者は、自分の体験の中で授業を通して学習したことを生かす具体的な方法を見つけにくいのではないと思われる。

このような多様な実態をもつ学習者に対して、それぞれのレベルから「生活課題を解決し生活を工夫し創造する力」を身に付けるためには、具体的なライフスキルに関心をもち、実生活に生かせる知識と技能を習得することが有効であると考えられる。「人の一生と家族」の単元では、本時の後、「ウ. 家事労働」「エ. 食生活において」を14時間で行っている。これらの学習の中で、具体的な家事労働分担の課題に向き合う機会を得たり、家族と関わるための手段を得た可能性もある。その過程を自己評価や形成的評価等によって本人がメタ認知する機会をもつことができれば、実践への足がかりを持つことにつながるであろう。

このように、生活設計の学習は、家庭科の多様な学習の成果に基づいて、スパイラルな形で行っていくことによって、より効果があがるものと考えられる。

本論は、家庭において父親が家事労働を分担することや、家族による団らん時間をとることを推奨することを目的としていない。多様な生活の現実を背景にもつ高校生を対象として、生活時間および生活設計の授業を設計するに当たり、個々の学習者に自分の現実と向き合う機会を十分に与えることの重要性を支持する示唆が得られたものと考えられる。

家庭科では、学習者が課題をもって主体的に生活を見つめ、日々の暮らしを工夫・創造する能力と実践的態度を身に付けることが目標である。この能力は学校教育の一教科としての家庭科で育成するには限界がある。それは日常生活における意味ある経験の積み重ねによって初めて子ども自身が自覚できるものとなる。また、その能力取得に不可欠な態度や生活観の形成は、生涯を通して時間をかけて変化し、つくられていくものであろう。

家庭科では、限られた学習時間の中で、できるだけ多様な価値に触れ、主体的に考える機会を設けたい。そのアプローチの手段として、体験としての実習やワークシート等によって自己の考えを記述したりまとめたりする作業を位置づけたい。

日本家庭科教育学会による2001年度の調査⁸⁾によると、高校生は、多忙で情報過多な生活の中、生活財や人への関わり方が表面的、消極的であり、その結果、様々な生活技能を習得する機会をもてていないことが明らかになっている。また、生活技能が乏しいために、身近な環境との関わりをもって生活認識を広げ深めていくことができないという悪循環に陥っていることも示唆されている⁸⁾。このことが、生活自立能力や共生能力の低下の要因になっているものと考えられる。

自分の生活価値を追究することと、実践可能な多様な生活技能を習得することは、家庭科学習の中で、相互に影響を及ぼす重要な要素である。その中でも、生活時間、生活設計の学習は、両者をカリキュラムにおいて有効に位置づけるために注目すべき学習である。

以上のことをふまえて、生活設計および生活時間に関わる授業展開を工夫し、授業実践を通して、学習過程における学習者の認識の変化を追究していきたい。

参考・引用文献

- 1) 平田道憲：「高等学校家庭科における生活時間設計の学習内容に関する研究—学習指導要領・教科書の分析と学習内容の構想—」, 日本教科教育学会誌, 第25巻, 第1号, pp. 31-40, 2002. 6.
- 2) 渡邊真由美・平田道憲：「高等学校家庭科における生活時間設計に関する授業実践」, 日本教科教育学会誌, 第25巻, 第3号, pp. 1-10, 2002. 12.
- 3) 文部省『高等学校学習指導要領解説家庭編』開隆堂, 2000.
- 4) 白井利明・都筑学・森陽子『やさしい青年心理学』有斐閣, 2004.
- 5) 中間美砂子編『家庭科教育法—中・高等学校の授業づくり—』建帛社, 2004.
- 6) 無籬隆・森敏昭他『心理学』有斐閣, p. 265, 2004.
- 7) 森敏昭・吉田寿夫『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』北大路書房, 1990.
- 8) 日本家庭科教育学会編『家庭科で育つ子どもたちの力』明治図書, 2004.